

## 靱チーム2006、さすらいの港町調査 「港町にとって、港とは」問うて三港めぐる

text photo\_bannai

昨年度に『靱雑誌2006』を発売して、靱の「空き家」再生潮流を紹介した有志靱チーム(中島直人助手、M2チ一、西原、鈴木、江口、坂内、M1ポンサン、吉田)。今年度は副題の問いを掲げて、他の港町事例を研究中。先8月16日から19日にかけて、訪靱に合わせて瀬戸田(尾道市)、手結(高知県香南市)の2港の現地調査を行なった。



左) 手結・歴史的港湾と跳ね橋  
上) 靱のまち歩き

8/16 瀬戸田の灯籠流し

8/18・19 手結の跳ね橋

深夜バスで8月16日早朝に三原に着いた本隊は、船で瀬戸田入り。午前中から4組に別れて、港まわりの建物調査、高台の眺望点さがし、役場や図書館での資料入手、登録文化財建築物で名高い耕三寺など、精力的に調査を展開した。夕刻には、夏祭りの流しそめん(名物のレモン風味!)にのどを涼ませてから、灯籠流しを見物。瀬戸田(一島と島との間の海峡・水道)を悠然と流れる灯籠の明りに一日の疲れを癒した。

翌18日早朝、先発4人(中島、鈴木、江口、坂内)は福山から高速バスで高知に渡る。台風がゆっくりと北上する荒れ模様の空の下、県立図書館での資料収集、県土木事務所へのヒアリング、現地先遣と三手に別れて調査。夕方には、靱見物をしていた後発4人と合流。

最終日の19日は、8人全員で、「日本最古の掘込港湾」手結港の、みなとまわり建物を悉皆調査。1時間おきに立ち上がる臨港可動橋の異景にうなりながら、何とか持ちこたえた天気感謝しつつ、午後後に解散。

8/17 靱へ

翌17日、M1二人は中島助手に率いられて一足先に靱入り(靱デビュー)。残りのメンバーは建物調査・文献調査の続きや地元商店会へのヒアリングに一日を費やして、日暮れるころ靱に到着。NPO法人「靱まちづくり工房」代表・松居さんのお宅に投宿して、近況の報告など。

ふりかえれば、毎日海を眺めながら、一度も泳がずじまいだった4日間。旅費などの都合もあって、各港1泊ずつの慌しいスケジュールだったが、誰に頼まれるでもなく、事前の文献調査のみを元にしなが、まったく未知のまちを歩いて問いの答えを探る旅には、靱チームならではの自由研究ぶりが横溢していた。



上) 瀬戸田の灯籠流し  
右) 瀬戸田・向上寺からの眺め



## 喜多方の夏、触れ合いの夏。 「語り合い」からまちづくりを考える

text photo\_ishii

5月から毎月欠かさず現地訪問を続ける2006喜多方チーム。今回の訪問では、ヒアリングやワークショップを通じて年齢は10代から60代まで、普段は直接「まちづくり」に関わっていない方を中心に色々な立場のみなさんと意見を交わす機会を得ました。人との交流はまちづくりの第一歩。ここで得たつながりや新しい視野は、今後の喜多方チームの大きな財産となりそうです。

### 〈まちづくり塾〉

8/26・27の2日間にわたり、「まちづくり塾」の第2チームが開催されました。今回の参加メンバーは、野原助手・D1永瀬・M2鈴木・早坂・イルジ・M1石井・横田・吉田。前回の話し合いの内容(8/1号掲載)を踏まえ、将来のまちのイメージを膨らませてきた各メンバー。この2日で対象数地も決まり、模型作成にりました。

また、喜多方の隠れた真髄である、農村部の「蔵の町並み」についても勉強しました。

### 〈観光調査〉

イルジ・石井の2名は喜多方に延長滞在し、28日~30日にかけて、JTBFの石山千代さん(研究室OG・喜多方P1期生)・中島泰さんと共に、合併後の喜多方市の観光戦略プロジェクト策定に先駆けての調査に同行しました。

今回は各観光関連事業者へのヒアリングと、関係者ワークショップの開催の2本立て。農協・市観光課・商工会・観光施設運営者など、「都市計画」とは一歩離れてのお話をうかがう

と、農村一市街の連繋の重要性、合併による観光への影響など、新しい視点に気づかれます。

ワークショップは工学院大学の窪田助教授にコーディネートしていただきました。非常に限られた時間でしたが、積極的な発言が飛び交う爽やかな内容となりました。

☐ まちづくり塾の様子

☐ 景観WSの様子

☐ 下三宮…壁に施された「こて絵」の意匠がみられる蔵がいくつも残る。

☐ 杉山…農村でありながら、豪勢な蔵が道沿いに並び「町並み」を形成。



右2つは農村部の蔵の紹介

## 阿部D4 博論発表

8月24日、工学部14号館141講義室において阿部D4の博士論文発表が行われました。

「スペインの歴史的市街地における保全再生戦略に関する研究  
バルセロナ旧市街における再開発の過程分析を中心に」

## 建

築単体はともかく、スペインの都市に関する総合的な学術研究は、日本においてはまだフロンティア。言葉の壁を破り、新たな地平を切り拓くパイオニアの発表を楽しみに、西村教授以下、20数名の聴衆が講義室に集いました。

50分の発表のあいだ、スペインの都市保全の潮流・欧州での位置づけといった概説に始まり、バルセロナ旧市街における多孔質型の都市保全プロジェクトの紹介に至るまで、解像度を次第に上げながら、スペインの都市計画の全貌が明らかになっていきます。日本のそれとはか

なり異なるシステムの紹介に一部戸惑いながらも、分かりやすい発表は総じて聞き手の関心をひきつけ、予定時間を超えても質問が集中しました。今後の全文の出版が楽しみです。

text\_ishii



日本に帰国してからというもの今日のこの日に向けて最終調整と準備に余念がありませんでした。阿部さんは私の席の後ろで毎日朝早くから遅くまで、集大成の重みを背中と語ってくれます…。いつのまにか溢れかえる書籍達。(塩澤)

## 8.28留学生壮行会

text\_bannai photo\_shiozawa

9月から日本を離れて欧州へ留学する竹山奈未M2（ウィーン工科大学へ1年間）、柏の空間計画研・松尾真子M1（リスボン工科大学へ8ヶ月）の壮行会が8月28日、本郷の「だん」で行なわれ、20名弱が二人を送り出した。野原・中島両助手からの激励、ベルギー留学経験のある田中D3や日本に留学中の韓D3からのアドバイスなどもあり、中味ある盛り上がりを見せた宴であった。



## 幸せおすそ分けツアーin横浜

### 永井OG宅に赤ちゃん訪ねる

text photo\_bannai

本紙第4号にたよりをくれた永井ふみ（旧姓藤本）OGの、生後3ヶ月となる長男陽太朗くんに会いに、新旧研究室メンバー5人（今春研究生修了OB酒井憲一、昨年度修士修了OG野上陽子、M2チー、西原、坂内）が8月27日、横浜に押しかけました。永井OGとご主人が、歓待してくれました。

「赤ちゃん学校」主宰の酒井OB指導のもと、我れ先にと陽太朗くんを抱く4人。たらい回しにされながらも泣かず騒がず、まだわからぬはずの絵本読み聞かせにじっと絵を見つめる陽太朗くん。学部時代から学年トップを争った母上の秀才ぶりが、早やほの見えました。

抱っこ初体験の記者（実は、永井OGと学部で同期）は、6キロあまりの赤ちゃんをおっかなびっくり抱いて、穢れを知らぬ瞳に見上げられて、ああ、幸せとは奈辺にあるものか、近くて遠いものかな、と、瑞々しい四肢のぷくりとした感触をたしかめたのでした。



野上OGによる絵本読み聞かせ

## 新宿プロジェクト

### 四谷・落合第二の夏

text photo\_shiozawa

## 夏

の到来とともに猛ダッシュで走り抜けた新宿プロジェクトの第2クール、四谷・落合第二地区もいよいよ終盤を迎えようとしています。8月22日には新宿区の地区計画課のお二人を迎え西村教授も交えて両地区の調査結果を報告。猛暑の中でのまちあるきと連日連夜の作業の成果は会議室の大きい机いっぱいにならされ、まだまだ未完ではありながらゴールが見えてきた兆しにほっと一息。8月の研究室は外気温に負けず劣らずエネルギーがみなぎっていました。手探りの第一クールの経験を

パネにより深く、早く、熱く繰り広げられた第二クール。22日の夜には研究室でちょっとしたお疲れ会をして、これからの残暑と共に最後のまともにかかります。



テーブルを囲んでビールとおつまみ。でも、まだこれからです。

## 中島助手の誕生日



伊藤 雅人

## 去

る8月21日、我らが中島直人助手「30」回目の記念すべき誕生日にささやかなパーティが催されました。突然9階研究室に集まりだす研究室のメンバーたち、おもむろに準備されるケーキ、突然電気が消え暗くなる部屋、そして聞こえてくる「HAPPY BIRTHDAY SONG」。こうして始まったサプライズパーティーでしたが、一番のサプライズは一曲終わっても当の本人が登場しなかったこと。電気が消えたことに気づきながらも作業に没頭していたその

姿は、日頃から「30になったら少しゆったりした生活を」と語る氏の、これからも変わらないひたむきな姿勢を暗示しているかのようでした。



助手2人+D4阿部でケーキ入り！

編集後記

text\_shiozawa

マガジンは月に2回発行されているわけですが、そうすると「おお、もう次号を考えなくては」というサイクルがあって月日の経過の早さを実感してしまいます。なにかにつけてマガジンのネタ探し...というわけではありませんが、坂内編集長にも日々、「アンテナを張っている！」とのご指導があるのでついついネタ探しにもなっている毎日。写真も必要なわけですが、このごろはM1のみんなの協力体制に感動。頼まずとも率先して「あ、このあいだの写真サーバーにUPしておいたよ。」とか、「この写真とらなくていいの!？」とか、編集部以上に敏感に反射してくれます。そもそもサーバーに知らぬ間に「マガジンの写真」というフォルダがありました。日々研究室の皆様を支えられながら、マガジンは更新されております。